

序

小児理学療法は苦手意識をもっている学生が非常に多い領域です。これは、患児の様子や実際の治療場面をイメージしづらいことから、講義中に習得した小児疾患・小児理学療法に関する基礎知識を臨床的知識として発展させにくいことが大きな要因として考えられます。さらに、臨床実習においても小児理学療法を経験できる学生はごく一部に限られてしまうため、すべての学生に小児理学療法に必要な病態から評価、統合と解釈、治療までの一連の理解を求めるることは非常に困難です。

一方で、理学療法士の臨床現場において小児分野は多様化しており、理学療法士が介入する範囲・活動の場が年々広がっております。そのため、養成校教育ではこれまで以上の実践的かつ幅広い知識を教示する必要があります。そのような現状から、これから的小児理学療法を担える学生教育を行うべく、本書の発刊に至りました。

本書の大きな特徴として、“最新の臨床現場に即した実践的知識の解説”，“小児から成人までの長期的な視点”，“小児理学療法の具体的イメージがしやすいイラストや動画の採用”を重視した構成としております。医療の進歩に伴い、理学療法士がかかわる対象疾患は大きく変容しています。加えて学術的知見の蓄積により、効果的な評価や治療もつねにアップデートされています。そのため、「Point」や「コラム」などを駆使しながら、最新かつ臨床現場に即した実践的知識の習得ができるような構成にしました。また、理学療法士がかかわる小児リハビリテーションは病院内のイメージが強いですが、近年は在宅で暮らすためのハード面・ソフト面の整備も加速度的に進んでおり、在宅支援にかかわることも非常に増えてきています。重要なのは、「将来どのように生きていくか、生活に必要な機能・能力や支援は何か」という対象者の将来を見据えたりハビリテーションを展開できるかであり、これは小児にかかわるすべての理学療法士がイメージしておくべき事項です。多くのイラストや動画を活用し、学生が理解しやすいような内容にまとめました。

本書を通じて、小児理学療法への苦手意識が払拭され興味と意欲が高まるとともに、「理学療法士があるべき姿」、「理学療法士ができること」を考えられる学生や理学療法士が増えることを願います。

最後になりますが、本書の発刊に際し手厚くご支援いただいた羊土社編集部の方々、ならびに丁寧に執筆くださった著者の先生方に深く御礼申し上げます。

2023年2月

平賀 篤
平賀ゆかり
畠中 良太